

第12号

発行：Dream 五代塾

吹田市千里山西 5-14-17

発行責任者：理事長 川口 建

「赤心」継がん

Dream

五代塾

Godaijuku

Sinbun (新聞)

2023 新春 インタビュー

田中光敏映画監督に聞く

てんがらもん

五代友厚と映画「天外者」と三浦春馬と

今日はお忙しい中、貴重なお時間を頂きありがとうございます。

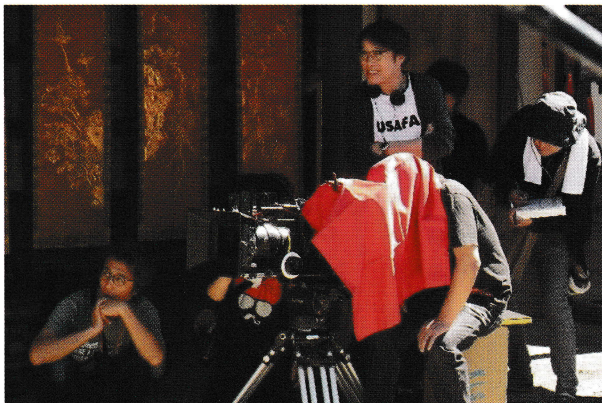
映画「天外者」は、2020年12月11日公開し大ヒットを収めました。現在公開から2年が経ちましたが、今も三浦春馬さんファンを中心に人気が続き、定期的に全国特別上映がされています。また、この映画をきっかけに五代友厚を勉強したいという方々も多く、Dream五代塾へも沢山の方が入会して頂き、一緒に勉強をさせて頂いています。

私たちDream五代塾は、五代友厚の事績顕彰と同時に多くの方に五代の志を知ってもらい、人生の羅針盤としていただけるよう活動を進めています。映画「天外者」は、その推進活動の上でも強力なバックアップを頂いた映画となり大変感謝しています。

今日は映画製作にあたり、「五代友厚」という人物をどう描こうとし、そしてそれらを表現していただくキャストイングのお話などをお聞かせ頂きたいと思います。

よろしくお願いたします。

(聞き手：川口由美子)



五代友厚を題材にする映画制作依頼に対し、どのように受け止められ、また、映画として描きやすい人物でしたか

(田中監督) 映画をつくる時にマ

スコミの方にも沢山インタビューを受けて、その時にも伝えた事なんですけど、基本的には5カ月位かなで作るか作らないかっていうのは悩みました。

それはどうしてかという、朝の連続ドラマで、ディーン君がやった朝

ドラの中で出ていた五代友厚さんしか僕は知らなかったし、そういう意味では、五代友厚という人が歴史上どういう人だったのかを、その5カ月の間に勉強をしました。

それとも一つは、本当にオリジナルの本が作れるのか、そして本当にこのプロジェクトが最後まで映画を完成させ、出来るまできつちりと形になっていくのかということを考え、たぶん6ヶ月に入る位に、じゃあやらせて頂きます。て、いう風にお答えしたのが正直な経緯です。

以前に発足したプロジェクトでは、脚本を一般応募した経緯がありますが、その脚本の内容などはご存知でしたでしょうか

(田中監督) 一切知らなくて、最初は大きな予算の話がされていました。ただ僕はその大きな予算の話よりも、あの五代友厚という人は本当に僕らがドラマとして描くだけの人物なのか、それとお客様が入るだけの強い強いストーリーをもった物語になっていくのか、つていうことが、僕の中では最大のテーマでした。

お受けするかどうかということに関しては、6か月後に条件として脚本家の小松江里子さんと一緒にやらせて頂くと思うんですけれども、それでもよろしいでしょうか、とお話をさせて頂きました。よろしいです、ということだったので、そこから脚本作りをスタートさせて頂いたということなんです。

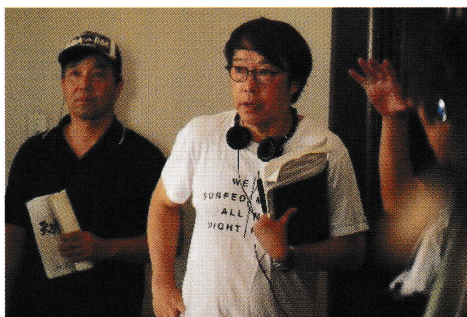
五代友厚を色々調べられた時に、五代友厚という人の生き方など、どういう人物として捉えられましたでしょうか

(田中監督) やっぱ素晴らしい人で、どちらかというと歴史の中にまだ埋もれていて、本当の意味で日本を救った人物ではないかな、つていうことを感じたこと、歴史の表舞台にこの五代友厚という人物を登場させたいという思い、あともう一つは、その頃に思っていたのは、やっぱり西郷どん(せごどん)という、鹿児島では西郷隆盛というのが一人の英雄として、今も根強くいらつしゃいますが、もう一人の対極として日本を動かす、そして日本を根幹から変えようとした人つていう意味では、五代友厚つていう人は非常に影響力を持った若きヒーローというか、僕にしてみるとそういう人物だったんじゃないかな

いかなつていう風に思います。

お受けしようとしてた時に五代友厚をこういう人物像で描きたいというイメージが、ある程度出来上がっていたということですね

(田中監督) 映画製作を受けるつていうことは、僕の中でこういう風にしていきたいと思いがあつたので、とにかく色々な伝記本や小説など読んでみると、幕末・維新の五代友厚が生きた時代は、日本が若い志士たちによって動かされた、そして若い人たちによって国が大きく舵を切つた時代という風に思え



ですね。

だから、坂本龍馬であったり、伊藤博文であったり、岩崎弥太郎であったり、グラバーであったりとか、そういう歴史上の若き人たちが、個人個人としては五代友厚と会っていたという史実を知って、この若い人たちが何か歴史上で会って、国を動かすまでの物語にならないかなって、というのが漠然とした僕の中でのアイデアがありました。

五代友厚は魅力的な人物であると感じられたんですね。その上で、映画では何を伝えようと考えられたのか、もう少し具体的に聞かせて頂けませんか？

(田中監督) 今の時代ってというのは、主演の春馬君にもよく言ったことですけども、「今だけ、金だけ、自分だけ」、要するに目先のことだけ。そしてお金のことだけ考えて、利他の心でなく、自分だけ自分中心に物事を考える、そういう時代の指導者は多い。

ただ、ここに登場する五代友厚や様々な若き志士たちは、自分のことよりも他人のこと、つまり、今のことも未来のこと、もっと先の日本のことを、お金よりもっと大切な価値観をもって世の中を動かそうという風を感じたんです。

そういう若者たちがいた時代なんじゃないか。そういう意味で言うと、今の時代だからこそこの五代友厚の物語というのは全くその正反対の生き様をもった若者たちが登場することによって、観ている人たちはきつと心を動かしてくれるだろうってというのが僕たちのテーマでした。

だからそれを春馬君に伝え、役者たちにも伝えて共感して頂いて、その中でキャラクターを固めていったというところはあります。

田中監督は脚本家小松江里子さんとのお

仕事が多いですが、ストーリー作りやセリフの内容について、どの程度キャッチボールされ、完成させていくんですか？

(田中監督) いつもそうですけど、本をつくるのは1年半から2年かかります。再考、再考、再考して、書き直し、書き直し、書き直して、そして今の時代とどういう風にリンクして、今の時代にどう物を申しながら物語を進めていくかっていうことは、小松さんと何度もキャッチボールをしながら、作っていったところはあります。

また、様々な人たちにもアイデアを頂いたし、その中では三浦春馬君演じる五代友厚っていう人が、どうやってたら今のこの世の中に登場させられるかがポイントになってきましたね。

映画のタイトル「天外者」(てんがらもん)という言葉ですが、「てんがらもん」という言葉は鹿児島にはあったと思うんですけど、どの辺でイメージが決まったんですか？

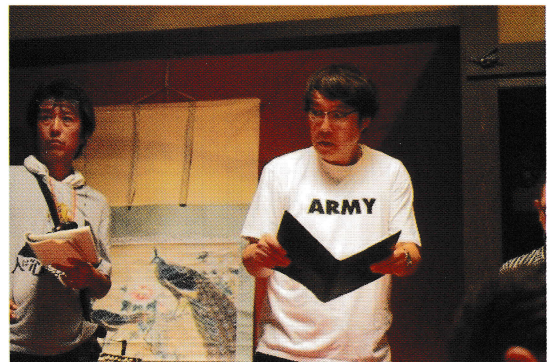
(田中監督) 本を書いている途中で「天外者」で行こう、行きたいと。

ただこのタイトルをご提案させていただいたときは賛否のご意見を頂きました。ただ僕と小松さん、それから出演者三浦春馬も始め、みんなは「天外者」いいじゃないですか、っていう思いが強く、だから、本当にこのタイトルが外されたら僕はほんとこの作品を降りるつもりでした。もう自分の作品じゃないなという、だから、それぐらい思いはあったし、音もよかったですし、この「天外者」っていう、言葉の意味もとてもいい意味で、春馬君が僕たちに教えてくれたことでもあるけれども、これは五代友厚が「天外者」だけじゃなくって、世の中にいるみんなが命を授かった時点で「天外者」っていうことですよ、っていう彼のその言葉も含めて大切にというか、このタイトルをち

やんとつけて世の中に出したい、って思いは自分の中ではありました。

それで

は、五代友厚を演じる三浦春馬さんについてお伺いしたいと思えます。最初に三浦春馬さんとの出会い、主役に選ばれた背景などお聞かせください。



い

(田中監督)

五代友厚は歴史上非常にもてた男性だと聞いていて、男前で美しくそれでいて心の綺麗な、そういう人をキャスティングしたいな、というのは思っていて、その時何年か前に三浦春馬君が大河ドラマ「おんな城主直虎」に出ているとき、三浦春馬って役者は、こんなに爽やかに、それでいてかっこよくて、こんな芝居をする人なんだ。いつかこの人と一緒に仕事をしてみたいなあと思っていて、そのころがあった、それでこの「天外者」、この作品に三浦春馬さんを何とかオファーしたいって思いを固めたという、僕の中には思いがありました。

映画撮影を通じ、三浦春馬さんの魅力を幾つか紹介して頂けますか？

(田中監督) キャスティングの最初に主役を三浦春馬に決めオファーしました。そして彼はオッケーをしてくれました。その後クラ

ンクインするんですが、実はそのクランクインをすると言っていたその年にはクランクインできなかったんですね。

やっぱりその映画の資金調達が明確になっただけでなかったことや、撮影所のスケジュール調整など、そういう色んなことが相まって、結局1年伸ばすことにしたんですね。

その時に本来ならば彼ぐらいの役者であると断られるんですよ。もう次のスケジュールがあるんで、と。ただ彼はもう1年待ちますと言ってくれたこと、そしてその待っていたおおよそ2年間の間に自分でプライベートで殺陣師さんに殺陣を習い、そして古き良き日本のそういう伝統とか文化ですね、それとか、例えば侍の所作、走り方とか、そういうことも含め本当に勉強し、僕が驚いたのは新渡戸稲造の『武士道』の本を彼が読んで、その時に儒学の中にある侍たちが学んだ言葉を自分も勉強して、心の中からその日本の文化っていうものをどっぴり浸かって今はやってるんですけど、そういう話を聞いた時に、彼は本当にすごいな、もらった作品っていうか、受け取った「五代友厚」という役を映画の中で生きるために、本当に頭から体の隅々までにそういうものを身につけて染み込ませてるっていうか、それに感動したというか、僕は感心しましたね。三浦春馬っていう役者は真面目だけじゃなくって情熱もあるし、やっぱりそういうところがすごく伝わってきましたね。

演出家って、僕はそうなんですけども、どんなに売れる人、どんなアイドルが来ようがその役そのものを勉強もせずに、小手先でやる人に愛情は向けられないですよ。どんな人でもそうだと思うけど、もらった役っていうか、その役を努力して努力して勉強して本当にその役になりきって、現場に入ってくる。こんなにも映画の中のこの役を愛してくれていたのかっていうことを知った瞬間に役を通

してと言つか、やっぱりその人その役者を好きになりますよね。そういう意味では彼のことを好きになったし、信頼できることもできたと、そういうことが三浦春馬っていう役者の凄さだから、そういう意味では、彼はもう現場に来る前に準備は万全だったし、心の準備も含めて、だからこそ現場ではのびのびと芝居をやっていたし、現場では自信を持っていて、そういうか、僕はそう感じましたけどね。

(次号に続く)

五代の生涯の偉業 「弘成館」鉱山業(三)

Dream 五代塾顧問 八木孝昌

半田銀山濁水処理「締約書」

半田銀山の銀精製過程で生じる「洗鉱水」が田地の「稲苗に害ある」という懸念が地元農民から寄せられて、半田銀山は「坑水壺瓶」と「坑水より出る沈殿物壺塊」を工部省鉱山寮に送って分析を依頼します。一八七六年六月二十一日付の鉱山師長ゼー・ジー・エッチ・ゴットフレー名の「分析書」(『五代友厚伝記資料』第三巻、史料八三、原文漢字カタカナ)が、鉱山寮から五代友厚宛に六月二十三日付で「相達」されます。「分析書」には、「此坑水は其浮動含有物を沈定して全く清浄ならしむる上は、植物に何等の妨害をも及すことなし」とありました。ゴットフレーはドイツ生まれ、帰化英国人の地質学者で、お雇い外国人でした。

この分析書をもとにして、同年七月八日付で半田銀山鉱長吉田市十郎と北半田村・南半田村・谷地村・塚野目村・伊達崎村の各物代等との間で「締約書」(『五代友厚伝記資料』第三巻、史料八四)が交わされました。まず前文

(原文漢字カタカナ)を見ます。

「締約書」前文と約定

洗鉱水は泥砂混合稲苗に害あるとの申伝へあるを以、田水必用之節四月より九月迄昨年限り相談中洗鉱休業致せしに、協議不相成遷延本年に至りしに付、日本坑法に鉱山営業者は他に損害及すことあれば賠償の責に任ず可きの明文あるを以て、其有害無害を明瞭にせんため洗鉱濁水及土泥を鉱山寮に差出詳細なる分析を願請し、後文に浄写挿入せる分析書被下渡、濃厚浮遊の粘土沈殿せし上は稲苗に無害なること明瞭に帰するを以て、今回四ヶ所の溜井を築造し、昨年築造せる三ヶ所を合せて七ヶ所の溜井を以て濁水を沈殿せしめ、其稲苗に患害を及ぼさしめず、間断なく洗鉱するに付、左の条々を締約せり。

このあとに十力条の約定が置かれています、主なものは以下のようです。

第一条では、北半田村の「深間湧出ノ全水」を農業用二、工業用八に分割することが約束されます。

第六条では、昨八年に築造した三ヶ所の溜井に加えて、鉱山機械所下の深間に「四ヶ所の溜井を新築し、鉱山に於て浚治(浚渫)の責に任ず」ことが規定されます。

第八条では、浚渫した「泥砂は降雨の節と雖ども用水堀へ流れ入らざる様」管理することが規定されます。

そして第九条では、「洪水にて溜井の土手崩潰しこれが為に村方の損害となりたるときは御本島の御見分」を申請した上で鉱山が賠償することが約束されました。

この締約書は、工場排水中の「泥砂」沈殿後の上澄み水は「植物に何等の妨害をも及すことなし」という、国の機関 鉱山寮による試験

結果が軸になっています。この時代の試験結果が二十一世紀の現在でも科学的に有効なかどうかは判然としませんが、少なくともその時代の科学的な知見に基づいて公害対策を講じたことは間違いありません。この「締約書」は文書として残る本邦初の公害防止契約書だったのではないのでしょうか。

前号で「弘成館規則自序」を見たときに、そこに述べられる「社員への利益配分」の先進性に言及し、公害問題に対する対処においても弘成館はまことに先進的かつ画期的な事例を曰本産業史に残していると言わなければなりません。



旧半田銀山二階平坑口跡

半田銀山の損益と職工給与

休止鉱山を入手した場合、採鉱には初期投資が必要で、半田銀山の場合、機械工場建設費・設置機械代金・鉄道敷設費等の外に田地汚染防止のための「溜井」築造工事が必要でした。半田銀山の経営資料が「自明治七年至同二十年損益計算表」(『五代友厚伝記資料』第三巻、史料六九)として残っています。そこには、通常経費以外に「二十五万七千円」の初期投資を要したと注が付されています。この初期投資を除外しても、当初の六年間は経費倒れの赤字で、毎年平均五千円ほどの損失が記録されています。黒字に転換するのは明治十三年(一八八〇)からで、明治十五年から十七年までの三年間に産出量も収益もピークを迎えます。精製銀総量の平均は約一、四〇〇貫(五、二五〇キログラム)、収益の平均額は約一、二六、八〇〇円でした。仮に現在価格換算を五千倍とすると、年間六億円ほどの利益が出ていたことになり、優良な鉱山だったことになります。

この三年間の使用人夫総数(同史料六九)は五三五、三四六人、年間平均は一七八、四四八人です。これは延べ人数であると考えられます。また当該三年間の給与総額は一四八、八七五円、年平均は四九、六二五円です。年間給与総額を職工数で割ると、一人当たり平均年収になります。その金額は九二円です。これを月額賃金に直すと、七円六六銭です。

明治初期の職工の給与がどれほどであったかを示す史料のひとつに『造幣局百年史 資料編』があります。五代は造幣局の事業に関わっていましたので、私見ですが、弘成館の鉱山事業を組み立てるに当たって、造幣局の規程を参照した可能性が大きいと見られます。その『造幣局百年史 資料編』の中に、職工の給与が出ています。初任給が五円、経験を積むと三年後に一〇円、特段の技能のない限りは、そこで頭打ちとなります。

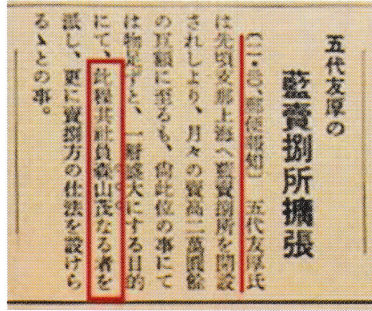
他方、半田銀山には「人夫賃高低一覧表」という資料が残されていて、「坑夫」の場合、日当が「最上等 三九銭」「最下等 三四銭」「平均 三八銭」と記録されています。平均の日当を月に二五円働くとして月額計算すると、九円五〇銭になります。この金額は造幣局の職工賃金とほぼ同じ水準です。

このようにして、半田銀山は造幣局職工並みの賃金をもって、多数の雇用を岩代国に創出していったことになります。(次号に続く)

朝陽館 上海売捌き所 五代豊子の兄森山茂が協力

Dream 五代塾会員(森山茂曾孫)
森山 治 (横浜在)

明治11年11月20日付けの郵便報知新聞に掲載された短信に、五代友厚が上海に藍の売捌所(朝陽館)の現地販売会社(しようか)を設立し、営業強化のために森山茂と云う者を派遣したと記されていました。五代が輸出事業に直接目を向けていたことを示す興味深い記録でした。この短信は当塾の川口建理事長が国立国会図書館デジタルコレクションを丹念に調べて見つけて下さったものです。



五代友厚の藍売捌所擴張

「11・20、郵便報知」 五代友厚氏は先頃支那上海へ藍売捌所を開設されしより、月々の売高二万円余の巨額に至るも、尚此位のことにては物足らずと、一層盛大にする目的にて、此程其社員森山茂なる者を派し、更に売捌方の仕法を設けらるるの事。

この記事に出てくる森山茂は五代友厚の妻・豊子の実兄ですが、友厚の親友であったと森山家では伝えられています。その略歴については既に五代塾新聞に掲載頂きましたが改めて人名辞典等に記載されている内容を参考にして簡単に紹介させて頂きます。

茂は大和の出身で、儒学家・萱野恒次(扇屋)

の長男として天保12年(1841)に生まれました。幕末期には尊王攘夷の志を持ち文久元年(1861)菅沼一平と変名して京坂にて国事に奔走する中で、儒学者(国学者)の森山履道軒(藤次郎)に師事し森山家を継ぐために養子となりました。文久3年の天誅組(天忠組)に加わっていたとの記録もありますが、奈良新聞社の竹村順弘記者に天誅組の研究団体で調べて頂いたところでは菅沼一平の名前は見つかりませんでした。多くの人が複数の変名を使っていたそうです。森山姓を名乗ったのも変名を兼ねていたと当家では伝えていきます。

当塾菅野豪夫顧問の推理では、菅野茂の変名菅沼一平には次のような法則があてはめられるそうです。菅野は菅沼(がぬま)姓は菅沼とも書く、野↓沼、茂↓一平。このことで、菅野茂と変名菅沼一平は同一人物と殆ど確信できる、と。どなたか菅沼一平の名前に心当たりや、文久元年の国事の意味についてご存じの方はお知らせ願います。

茂は明治2年より新政府の兵庫県裁判所(県庁)で伊藤博文のもとで働き、大阪の五代友厚と親交を結ぶようになります。翌年に友厚は茂の妹豊子と結婚します。茂は現在の外務省に移り困難な朝鮮外交問題に携わり、後の日韓併合に繋がる日朝修好条規(江華島条約)の締結が整ったのを機に、明治10年退官しました。その後、12年元老院議員、23年富山県令、27年から大正8年に亡くなるまで勅選貴族院議員を25年間勤めました。

この略歴

からもお分かりの通り明治11年前後の活動が空白になっています。



森山 茂 明治20年頃?

茂はもっぱら外交・政治の仕事に携わっていたと思っていましたがこの短信を見て、無冠の一年余りの時期に友厚と共に実業の世界で活動していたことを知りました。

明治10年前後、茂の子供、愛子と松之助は五代家に預けられ豊子に養育されていたと聞いておりますので、その背景の一つとして茂が上海へ頻繁に赴く多忙な時を過ごしていたのではないかと納得しました。

*愛子：日本歯科医学会の祖・高山紀齋の妻) *松之助：明治後期から昭和初期にかけての建築家、台湾・日本に作品が現存

また茂が富山県令(勅撰知事)を務めている時、地場産業の一つである『井波紬』の生産を農家の副業として奨励し県民の収入増を図ったそうです。『井波紬』は現在では廃れてしまったようですが、大正期に最盛期を迎えた『染織事典』に著されていますので、当時の産業発展に寄与したことが伺われます。この様な施策を打ちだせたのも五代と共に活動した間に培われた知見によるものではないかと推察します。

私は茂の曾孫に当たり、去年の10月大阪で開かれた五代友厚墓参会に長女と一緒に参加させて頂きました。当日は永らく交流の途絶えていた萱野家に繋がる堂本家の方々、五代家所縁の永見家に繋がる方々にお目にかかる機会を得ることができ、親族を再び結びつけて頂いた貴重で心に残るひと時となりました。墓参会に参加された皆様には五代公の塋域の近くにある萱野、森山両家の墓にもお参りして頂きました。森山家の墓には上述しました履道軒(藤次郎)夫妻が眠っていますが、没後160年の時を経てこのような大勢の方々にお参り頂き、とても驚いているかと思えます。この場をお借りして御礼申し上げます。

(森山茂夫妻の墓は東京青山にあります)

ふるさと納税で田中光敏監督の映画制作を応援しませんか!!

①「親のお金は誰のもの 法定相続人印」志摩市を舞台に「人の幸せの在り方」を考える、社会派ハートフルコメディの映画。今年の夏以降に公開を予定。

②「北の流水」(仮題) 1950年代に森林伐採で砂漠化した荒れ地に(浦河町、様似町、えりも町、広尾町)地元漁師らが木を植え続け、豊かな森と海をよみがえらせた史実。日本人の魂やあるべき姿を未来へ伝承することをテーマにした映画。年内に企画準備・クランクインを目標。

ふるさと納税は「寄付金の使い道」を選ぶことができます。サイト内には「映画制作事業」が設定され、これを選べば、田中監督の映画製作を直接応援することができます。申込方法↓各市町のHP、又はふるさと納税の各サイトが準備されています。右の各QRはその一例として楽天QRを掲載しました。



編集後記 今年もコロナの話題が中心となりそうであらう。第8波突入で感染者、死者数が過去最高とマスコミは煽る。予防注射も打ち、基本的な感染対策はしっかりしているのと思うのだが？ また専門家の説明する理屈も辻褄が合わなくなっている気がする。一方、観光を含む人流は経済との兼ね合いという理由で、最近では容認発言一色だ。何が何だかさっぱりわからない。政府、医療専門家、マスコミはそれぞれの自利のためにのみ動いているような気がする。情報は正しく・バランスよく発信してほしいものだ。どうするニッポン！今年もよろしくお祈りします。(川口建記)

連絡先：川口建
Tel: 080-4497-5688 Email: gogoken12345@gmail.com